

保育実践力を育む取り組み

ーピアノ授業における改革ー

Developing the Implementation of Early Childhood Care and Education

～ Reforming the Educational System of Piano Class ～

加藤 明代, 森 広樹

KATO Akiyo, MORI Hiroki

キーワード：保育実践力、ピアノ、弾き歌い、授業効果、子ども主体

Keywords: Implementation of Early Childhood Care and Education, Piano, Acoustic Singing, Outcome of Classroom Learning, Child-centered

概要

本学では保育者を目指す学生に身に付けてほしい表現技術の一つとして、ピアノ授業を位置づけてきた。一昨年に授業全般を見直し、ピアノ実技に関わる全教員でその内容の共有を図った。本研究では、従来のピアノ授業の内容の変遷をたどり、問題点を整理しながら改善に至った現在の授業がどのような効果を上げているかを考察した。それによって、個別指導の内容の充実を図り、基礎力強化と実践的な内容のバランスをとっていくこと、自学の意識づけ、弾き歌いの取り組みにおいて課題が認められた。また指導教員と学生が対話しながら解決の方法を模索していく内容や、音楽関連授業と連携しながら育むべき内容があることを再確認した。

平成 31 年の保育士養成課程改正に向けて、改めてピアノ授業の在り方を考えるとき、本研究で得た見解を指導教員に発信し、専任教員と指導教員が情報・意見交換する機会を大切にしていきたい。そして「子ども主体に展開される保育におけるピアノ」について共通理解を持って、それを学生指導に生かしていきたい。

I. はじめに

本学では、保育者を目指す学生に身に付けてほしい表現技術の一つとして、ピアノ実技の授業を 2 年間開講している。そして多くの保育者養成校もその実施体制に違いこそあれ、ピアノ授業を必要と考えカリキュラムに取り入れている。このことについて村上玲子ら(2017)は「養成校の教員や保育の現場では、子どもの歌にはピアノ伴奏が望ましい、日々の活動の中でピアノが習慣づけられている、発表会でピアノを使用することもある等、ピアノのニーズは非常に高い、という認識がある。採用試験にもピアノの実技を課す保育所・幼稚園が多い¹」と指摘している。実際、本学に寄せられた求人票からピアノ試験（弾き歌い、またはピアノ曲）の実施状況を見ると、平成 29 年度においては、県内私立幼稚園と認定こども園（幼

稚園から認定こども園に移行した園を含む)では約 70%、私立幼稚園単独であれば約 80% である。私立保育所と認定こども園(保育所から認定こども園に移行した園を含む)においては約 30%であるが、求人票に「自分が得意とするもの、例えばピアノ、リトミック等」の記載があったり、面接試験の中で、ピアノの習得状況を質問する保育所もある。4年前の求人票によると、私立幼稚園においては約 90%に、私立保育所においては約 50%にピアノ試験が課せられていたので、いずれも減少傾向にあるが、それでも高い実施率である。また県内公務員試験においてピアノ実技試験を課している市町村もあり、さらに、国家試験である「保育士試験」の実技にも弾き歌いが導入されている。

このような背景の中で、本学ではピアノ実技授業を、1年次は必修扱い、2年次は選択授業として、教科目「保育の表現技術」の一つに位置付けてきた。実際の指導は非常勤教員が担当している。実施形態は個人レッスンであるが、MLシステム導入によって、特に初心者においては、より長時間の練習が確保された「集団と個」を組み合わせたレッスンが可能となった。一昨年には、加藤がその授業担当になったことを機に、授業全般を見直し、ピアノ実技指導に関わる全教員でその内容の共有を図った。

この改善に至るまでには、幾度かの方針や内容などの変更があった。加藤が着任した当時は、ピアノ実技は教科目「基礎技能」の一つであった。それが平成 22 年の保育士養成課程改正の「保育の表現技術」を経て、更に平成 31 年度には教科目「保育内容の理解と方法」となる。そこでは音楽表現・身体表現・造形表現・言語表現という括りは消えて、「子どもの生活と遊びを豊かに展開するために必要な知識と技術を実践的に習得する」²ことを目標としている。これまで「保育の表現技術」の一つに位置付けてきた本学のピアノ授業は、その変更の十分な理解の上に実施される必要がある。果たして学生の現状に対応したものとなっているのか。そしてこの改正で保育者養成校に求められる知識と技術の育成にどう繋がっていくことができるのか。改めてピアノ習得の意味やその内容の方向性を検討していくことが急務であると考えている。

そこで本研究では、これまでのピアノ授業内容の変遷をたどり、問題点を整理しながら改善に至った現在の授業が学生にとってどのような効果をあげているのか、その授業効果の実際を把握することによって、その結果を更なる授業内容・指導改善への一助としていくことが目的である。

II. 研究方法・手順

保育士養成課程教科目「基礎技能」の時期から音楽全般に関わりのあった加藤が、現在の内容に至るまでの本学のピアノ実技授業の目標・内容等について報告する。

そして現在のピアノ授業における効果について、学生及びピアノ指導教員に実施したアンケートの分析結果から考察する。ここでは「ピアノ授業を通して育まれる具体的な内容」に焦点をあてて、実際に学生と教員各々が「何ができるようになり」「どのような力がついたと感じているのか」さらに「どのような力をつけたい」と願っているのか、それらの結果からの考察となるが、これは授業見直し後の翌年の日本保育学会における発表内容³を参考にしている。

更に翌年、弾き歌い試験における評価基準を再検討したことに伴い、改めて弾き歌いにお

けるアンケートを実施した。学生自身が自らの習得状況をどのように捉えているかについて、Ⅴ章からⅧ章で森が分析。本学ピアノ実技授業の課題を明らかにし、改善していく手掛かりを得る。

本研究「結果・考察」で扱う内容については後述するが、調査対象・日時・方法については以下の通りである。

○「本学ピアノ実技の授業効果」

調査対象：本学1年生206人、2年生188人、ピアノ担当教員22人

調査日時：平成28年12月、音楽関係科目の授業内で授業担当教員に協力を得て実施

調査方法：ピアノ授業についてのアンケート調査

○「弾き歌い」

調査対象：本学短期大学部1年生190人、2年生188人

調査日時：平成29年1月、後期ピアノ試験終了時に実施

調査方法：弾き歌いについてのアンケート調査

尚、これらの使用については、事前に口頭と文書で被験者に説明を行っている。

Ⅲ. 本学ピアノ実技授業の目標・内容等の変遷

1. 保育士養成課程教科目「基礎技能」の時代 一二回の変更一

教科目「基礎技能」には、養成校で学ぶべき内容として「音楽に関する基本的な知識技能」の項目があり、そこには「子どもの歌、簡易楽器、ピアノなど器楽による伴奏法など保育実践において必要な知識や技能」と明記されていた⁴。また、幼稚園教育要領の領域「表現」にも「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」と記載されていた⁵。これを反映して、その方針は「ピアノの基礎的な技術の習得」と、歌唱活動に対応できるよう「弾き歌いに慣れる」ことであった。

教材には、バイエル、ブルグミュラー、ソナチネアルバムを使用し、ピアノ演奏技術によってグレード制が敷かれていた。学期末試験の他にグレード試験があり、バイエル終了レベル以上の学生には弾き歌い試験も導入されていたが、授業は、基礎的なピアノ技術の習得に重点が置かれていた。

1) 一度目の変更

ピアノ担当専任教員の交代により、保育におけるピアノ授業全般の改革があった。大きな変更点は、「歌の伴奏楽器としてのピアノの役割を意識した」グレード制の見直しにある。従来のピアノ曲のレベルで編成したグレード制を、新たに歌唱教材の伴奏課題レベルで設定した。それは「メロディー奏、ベースコード奏、ハーモニー伴奏、移調奏、簡易伴奏即興奏」である。学期末試験ではこのグレード課題による歌唱曲と、任意のピアノ曲を試験課題とした。それは「歌唱伴奏の習得」という課題意識の定着と、「任意のピアノ曲による演奏の享受」という自由意識の満足、この両方の視点の重要性を明確にした改革であり、教材選択や指導上の留意点についても具体的な指摘があった。当時の担当専任教員は「ピアノは子ども達の音楽活動を支える補助楽器であり、歌のガイドとして歌を歌うかのようにピアノで演奏できること」と、ピアノ指導教員に向けた授業ガイド⁶に記載している。音楽活動の主体である

子ども達の歌を支えるために「ピアノで表現できる」ことの大切さを強調している。

学生の習熟度に合わせた伴奏付けの方法を具体的に提示したグレード制であったが、これに加え、現実的には当時の採用試験で出題の多かったソナチネ・アルバムや同等レベルまでにピアノ技術力を育てる必要があり、その両立への模索が指導教員側にあったと聞いている。

2) 二度目の変更

新しい専任教員を迎え、当初は従来のやり方を受け継いでいたが、伴奏課題の指導の有様や学生の習得状況の検討から「レパートリーを作ること」をより重視する方針に転換する。伴奏課題レベルによるグレード制に代わって、楽譜に従った伴奏での弾き歌いを課題としたグレード制に変更となった。しかしながら、具体的な達成目標や内容が明確でなかったために、子どもの歌のレパートリーを作ることを目的に掲げながらも、その成果を十分あげることができなかった。

2. 保育士養成課程教科目「保育の表現技術」の時代

平成 22 年の保育士養成課程改正によって教科目「基礎技能」が「保育の表現技術」に変更された際には、学生が学ぶべき「基礎技能」の一例として記載のあった「ピアノなど器楽による伴奏法」の表記も削除された⁴。

「保育の表現技術」では、その目標の一つとして「子どもの遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術を習得する」ことが示された。このことを村上ら（2017）は、「保育現場への連続性が明確に示され」、さらに「学生を中心にした展開から、子どもにおいて展開される保育という視点の転換」であったと述べている⁷。

このような改正の基に、ピアノ授業の意義やあり方を模索していくこととなった。本学では、平成 20 年以降にピアノ試験を課さない体験入試が導入されたことで、ピアノ経験の浅い学生が増加する。高校では音楽が選択性であることも、異なる音楽経験の学生の入学に繋がった。当時の担当専任教員は、平成 23 年からグレード制を廃止し、学生の習熟度に合わせた内容を提案している。ピアノ自由曲と弾き歌いを扱うことは従来通りであるが、特に、弾き歌いの使用楽譜や調性については、各学生の技術レベルに適した難易度の楽譜の使用を認め、「楽しみながら」ということを強調した点において改革であった。しかしながら、目標と学習内容や評価との関連が不明確で、各指導教員の裁量に任されている部分が多く、混乱が生じた。

3. 現在のピアノ実技授業の目標・内容等について

1) ピアノ授業の必要性

平成 28 年度よりピアノ授業を加藤が引き継ぎ、見直しを図った。「子どもの遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術」の一つとして、ピアノの基礎的な演奏技術の習得と弾き歌いの力は必要である、と信じての改革である。

さて、子ども達にとって「歌うこと」は、最も身近かで人間味ある音楽である。ピアノ授業における指導教員は、主としてピアノの専門家であるため、「歌うこと」については他の音楽関連授業との連携が必要と考えるが、それでは、ピアノ授業におけるピアノ学習の意義とは何であろうか。

その技術習得には時間を要するため、かつてはピアノ授業の必要性を疑問視する意見さえ

あった。「歌唱時の伴奏楽器としてのピアノの偏重やさまざまな機会でのピアノの多用は目立って日本特有の現象であるらしい」⁸と安田寛ら（2010）が指摘しているように、外国ではピアノ以外の、より扱いやすい楽器の一つとしてギターを使用している、という話も聞く。しかしながら、ピアノは「メロディーもハーモニーも奏することができ、強弱の幅、音域の幅ともに大きく、また細やかな音量の変化を表現することも可能」⁹であり、だからこそ子ども達の状態に合わせて演奏できる楽器である。加えて音・音色の側面からもピアノは身近に魅力ある音楽環境を提供できる音具でもある。子どもの音や音楽への興味関心が広がっていくような環境の一つとしてのピアノの存在は大きいと考える。

以上のことから「弾けないよりは弾けた方がいい」「知らないよりは知っていた方がいい」という消極的な考え方ではなく、上記のピアノの特性をピアノ学習の過程で体験しながら技術を身に付けていくことを、ピアノ授業では目指している。

また、子どもの歌の伴奏は、子どもたちの歌声を支えるだけでなく、学生の歌声を支えるものでもある。2年生のほぼ全員が実習において歌唱場面での弾き歌いを経験しているが、これはまさにピアノ授業での成果を最も反映できる機会となっている。「子ども達が自分の伴奏で歌ってくれた」「子ども達と音楽を共有できた」という喜びが学生にとって「もっと練習しよう」という学習意欲に結びつくと考える。平成29年には、弾き歌いを充実させたいと願い、具体的な指標を作成している。

ところで、毎年、学生にはピアノや音楽経験について簡単な聴き取りを行っているが、近年の入学者は、約10%が初心者、3分の2はバイエル前半レベルという傾向があった。全ての学生の居住先にピアノあるいは鍵盤楽器があるわけではない。学内練習室の使用時間帯は限定されている。次年度も同程度の環境であると仮定して、授業の目標をどのレベルに設定できるのか、そしてそれを実現するためにどのような課題を設定すべきかなどを検討していくこととなった。

尚、指導教員は1コマに4～5人を担当する。2年次のピアノ授業は選択科目であるが、毎年約90%の学生が履修している。2年次ではグループを再編成して、同じ教員が担当しないよう配置し、2年間の間に異なる教員から指導を受けることができるようにしている。

次に、特に見直しを図った内容について記す。

2) 改善を図った内容について

- ①各学年の目標に呼応した達成目標を提示し、授業単位取得と関連付けた。
- ②試験課題に、各学年における目標の内容を反映させた。
- ③評価基準・方法を具体的に設定し、主観的評価と客観的評価のバランスを考慮した。
- ④学生自身が自らの学びや曲名などを記録することで意識付けを図った。

過去の授業を通して得た内容や問題点を振り返る中で、現在の授業ガイドでは、目標に達成しなければ評価に反映する、ということを明確に打ち出した。目標に向けて努力した結果が評価されるという仕組みは、学生の取り組み姿勢への意識付けに必要なだと考える。

1年次のピアノ授業の目標は、「基礎的なピアノ技術の習得」及び「弾き歌いを通して弾いて歌うことに慣れる」ことである。ピアノ技術が一定レベルに到達しない場合は単位認定

ができず、さらに達成目標として、ピアノ曲と弾き歌いのそれぞれに、経験してほしい曲の数を提示した。試験課題は、ピアノ曲と弾き歌いである。2年次の目標は「ピアノ技術をさらに高める」及び「弾き歌いのレパートリーを広げ、弾いて歌う力・表現する力を高める」ことである。授業では弾き歌いが中心となり、音楽を楽しみ表現するための補助としてピアノ技術を高めていく、という解釈である。バイエル終了レベル以上の者については、自由曲・課題曲ともに、弾き歌いを試験課題とした。尚、弾き歌い試験では、両学年とも、3曲の課題曲から当日1曲指定で演奏する。

教材については、複数教員が試験の採点に関わることに配慮して、バイエル終了レベルまでの試験曲は、バイエル教則本からの選択にしている。一方、平常レッスンでは、バイエルに固定せず、各教員自らが熟知し、かつ学生に適していると判断する教本を使用しながら、それぞれの指導経験や個性を尊重した方法で授業を展開することにした。

過去に幾度かグレード制を取り入れてきたが現在は無い。グレード試験は授業時間内で実施するため、実際のレッスンの回数が減ってしまう。またグレードを上げることが目標となり、そのための練習に終始してしまうことが予想されるからである。学生の習得状況に見合った個々の目標があって、それを達成する体験を積み重ねながら、最終的に保育現場で活かすことのできる力量をつけて欲しいと考える。

弾き歌いの楽譜や調性については、これまでの扱いを踏襲し、編曲されたものを使用したり、コードを活用するなど、ピアノ技術レベルに配慮した楽譜の使用を勧めている。「レパートリーにしたいが伴奏が難しいために断念せざるを得ない」ではなくて、挑戦することに前向きであって欲しいと考え、伴奏部分に柔軟性を持たせている。

ところで、評価基準や方法を具体的に設定したことも大きな改革であった。これまでの問題点は「努力と成績が必ずしも比例していないこと」「指導教員によって評価に差があること」等、評価についての考え方の違いにあった。また、採用試験にピアノ実技のないところは、ピアノ授業の成績を参考にしているという声も聞いたことがあり、信頼性のある成績評価の基準が必要となった。

そこで評価に関わる内容全般の見直しを行った。評価項目にはピアノ進度レベル、努力度、そして試験による評価などを設定した。当日の試験は言わば、現場でこれまでの学びを生かすことができるか、という成果発表の場である。日頃の努力を認める指導教員の評価も大切にしながら、客観的な視点、即ち他の教員の評価を加え、総合的に評価する仕組みを提示した。さらに、弾き歌い試験では、具体的な評価の視点を設定した。各項目の点数の合計に例外事項を加味して最終的な評価を算出した結果、「優」評価の基準が明確になり、努力不足の学生が極端に良い評価を得ることは無くなった。この算出方法が幾分複雑であることに課題はあるが、指導教員からは妥当な成績が望めるようになったと、その効果は概ね認められている。今後も専任教員と指導教員でこれらの内容・評価などを確認・共有し、より効果的な授業を目指して、意見交換の機会を年数回実施していく予定である。

もう一点重視したことは、学生自身が習得状況やレパートリーを把握できるよう、自ら記録することを徹底させたことである。レパートリーが増えていく喜びはまた、学ぶ意欲を喚起する原動力になるのではないだろうか。指導教員が勧めた曲だけを練習するのではなく、学生自身が能動的に取り組み、自ら楽しいと感じる曲に挑戦し新たなレパートリーにしていく姿勢を持ってほしいと考える。

次に、この授業における授業効果について分析、考察する。

IV. アンケート結果分析からの考察 —本学ピアノ実技の授業効果—

今日の大学教育では、『何を教えるか』よりも『何ができるようになるか』に力点が置かれる¹⁰を念頭に置いた改革が求められている。

そこでここでは、本学の学生が、そして担当学生について指導教員が、「何ができるようになり」「どのような力がついた」と感じているのか、という「ピアノ授業を通して育まれる具体的な内容」に焦点をあてて授業効果を検討した。

1. 調査内容

1) 1年生・2年生対象

①ピアノ学習経験、現在の進捗と練習頻度（自由記述）

②「ピアノの力がついたと思うか」について

「力がついた」「どちらかと言えば力がついた」「どちらかと言えば力がついたとは言えない」「力はない」からの選択である。

③「どのような力がついたと思うか」について

選択式による項目と自由記述による項目の2つを設定した。

選択肢は「読譜力」「演奏技術」「コードネームを見ながら弾く力」「伴奏をアレンジして弾く」「表現力」「弾き歌いの力」「歌のレパートリーが増えた」「言葉かけをしながら弾く」「子どもの方に視線を向けながら弾く」の9項目で複数選択が可能である。

④「どのような力をつけたいか」について（自由記述）

2) ピアノ担当教員対象

①（担当学生が）「ピアノの力がついたと思うか」について

学生への調査と同様に、4つからの選択である。

②「何をもって、力がついた（進歩があった）と判断したか」について

学生への調査と同様に、選択式による項目と自由記述による項目の2つを設定した。

③「どのような力を育みたいと考えて指導しているか」について（自由記述）

尚、アンケート結果は、日本保育学会第71回大会のポスター発表「保育者養成校におけるピアノ授業についての一考察」³において報告している。

アンケートでは、上記の授業効果に関する設問の他、実習においてどのようにピアノが活用されていたか、またそれに触れたことでピアノの役割をどう意識したか、についても質問しているが、この研究においては、特に授業効果の部分を扱う。

2. 調査時の学生の実態

本学に入学する学生の約10%はピアノ初心者で、約70%が「初心者～バイエル前半レベル」である。正課外でピアノを学ぶ機会を持っていると回答した学生は両学年とも約35%であり、多くの学生にとって、正課授業が弾き歌いやピアノ技術習得の唯一の機会になっていることが認められた。

また練習状況については、1週間あたり1年生は約60%が2～3日、2年生は約80%が

1～3日であり、練習量は1年生の70%、2年生の65%が30～60分と回答している。

3. 授業効果について

1) 「ピアノの力がついたと思うか」について

「力がついたと思うか」の設問には、両学年とも94%が、ピアノ指導教員の89%が「力がついた」「どちらかと言えば力がついた」と回答している。

授業実施に当たって具体的な目標・内容等を整理したことは、指導側にも意識の改革を与えたと感じている。個人レッスンの待ち時間を利用して楽典やコードなどの復習を行ったり、担当グループ全員で歌う時間を設定するなど、各指導教員が工夫をしている。

また、各学年の目標を明確にし、記録によって自分自身の習得状況を可視化したことは、学生の取り組み姿勢に刺激を与えた、と指導教員の記述にあった。

2) 「どのような力がついたと思うか」について

集計表はIV章の終わりに掲載する。

① 1年生・2年生の回答を通して

両学年とも「読譜力」「弾き歌いの力」「歌のレパートリーが増えた」を多くが選択し、その後、「演奏技術」「コードネームを見ながら弾く力」が続く。「弾き歌いの力」は1年生では約40%であるが、2年生では約60%が選択しており、「弾き歌い」に力点を置いた授業内容と演奏技術の向上によって、少しずつ力がついてきたと言える。1年生で最も選択率の低かった「子どもの方に視線を向ける」や「言葉かけ」は、2年生でも高い数値ではないが、1年生と比較すると、そこには子どもを意識しながら伴奏するという姿勢がある。

「伴奏をアレンジして弾く」は、両学年ともほぼ最下位の選択率であった。子どもの歌声に耳を傾け柔軟に対応していくために必要な技術であるが、各学生の演奏技術レベルにあった伴奏アレンジの必要性から、各教員の指導に委ねている部分が多い。その方法の一つである、コードネームを利用した伴奏形の学習は、他の音楽関連授業でも取り入れているが、ピアノ授業との連携を一層図っていきたい。

自由記述では、読譜力と演奏技術に関するものが多い。そこには1年生と2年生の受け止め方の相違が読み取れる。両学年とも「譜読みが速くなった」と記述しているが、2年生には「一人で楽譜を読んで弾ける」「簡単な初見もできる」と進歩がうかがえる。また演奏技術については両学年とも「手を見ながら弾くことが減った」「左手が動く」「両手で弾ける」「指が速く動く」などあるが、2年生では「力の抜き方がわかってきた」「右手と左手で音量の差がつけられる」「強弱がつけられる」と具体的である。さらに多くが「歌いながら弾くことに慣れてきた」と記述している。「曲に気持ちを込めて弾く」「曲の雰囲気を感じて弾く」「子どもに伝わるように弾く」等、表現力に関わる内容もあった。身に付いた技術を使って表現しようとする意識が出てきたと言える。

その他、1年生では「集中力が続くようになった」「毎日ピアノを弾く習慣ができた」、2年生では「前向きにピアノに向き合えるようになった」「難しい曲にも挑戦しようと思えるようになった」と、取り組み姿勢にも変化が見られた。

②ピアノ指導教員の回答を通して

教員の回答は担当学生の評価であるため、選択率を学生と比較することはできない。そのため、その順位で傾向を見ていく。1年生・2年生、そして担当教員とも上位の回答は「読譜力」「歌のレパートリーが増えた」「弾き歌いの力」で、教員側も学生も共通であった。その後、1年生の教員では「演奏技術」、2年生の教員では「表現力」が続く。ここで筆者らにとって予想外であったことは、学生と教員側の比較において「表現力」の項目に大きな相違が見られたことである。2年生担当教員では4番目に高い選択率であり、「個々のレベル内で最大の表現力を引き出したい」「長く難しい曲より短い曲で表現豊かに演奏することを大切にしたい」等の自由記述からは、技術と表現力を切り離して捉えずに、並行して身に付けていくべきではないかという姿勢が伺える。それに対して、学生の「表現力」の選択率は低く、2年生においては9項目中8番目である。これは何故であろうか。「技術を習得してから表現力をつける」「技術が十分身につけていなければ表現することは難しい」「技術が不十分なので表現できない」と捉えているのかもしれない。あるいは、教材が学生のレベルに適していないのかもしれない。あるいは、表現力が身に付いてきていることに学生自身が気づいていないのかもしれない。本来、子ども達の歌声を支え、一緒に表現していくことを楽しむための技術であるにもかかわらず、表現する力が身に付いていないと感じている学生の実態を、ピアノ教員全員で共有し対応していきたい。

3)「どのような力をつけたいか」(学生)、「どのような力を育みたいか」(教員)

両学年とも「楽譜を見てすぐ弾く」「子どもの方を向きながら弾く」「子どもたちの声に合わせて弾く」「子どもが気持ちよく歌えるように弾く」「止まらないで弾く」「歌のレパートリーを増やす」等、歌唱活動を支える伴奏についての記述が多い。実習において、子ども達が保育者の伴奏で生き生きと歌ったり動いたりしている様子を目の当たりにした学生達にとっては当然のことと言えよう。

一方、指導教員側の「育みたい力」では、「いかに短期間で正確に弾けるか」「卒業後も自力で正確に譜面を読み、自分なりに表現できる力」「どのような練習方法をすればよいか考える力」等がある。多忙な保育現場でも自学できるように、長期的な見通しの中で基礎力の定着を目指していることが分かった。

この結果は、学生と教員では授業に求める内容に相違があることを示している。基礎力が向上し、自学できる力がつけば、現場のニーズに対応できるのではないかと考える教員に対して、学生は保育現場ですぐ役立つ実践的な内容を求めている。改めて「基礎力の定着と実践的な内容のバランス」が重要であることを確認した。指導にあたっては学生の習得状況を加味しながら、学生と共に相応しい内容と方法を探っていくことが大切である。

4. 総合的な考察

前項では、学生や指導教員が感じた「ピアノ授業を通して育まれる具体的な内容」に焦点をあてた調査結果の分析から考察を行った。

「力がついた」という回答を「授業効果があった」と解釈できるならば、学生と指導教員の約90%がそのように回答したことは、大きな意味があったと言えるだろう。また、「力がついた」具体的な内容を見たとき、ほぼ全ての項目において、1年生との比較で2年生の方

が同程度あるいはそれ以上の高い回答率を得たことは、少しずつ「力がついてきている」と評価できるのではないだろうか。自由記述からもその習熟の状況が認められた。

しかしながら、回答数の多かった「読譜力」や「弾き歌いの力」でさえ、2年生で約60%である。9項目中4番目に回答数を得た「演奏技術」にいたっては、両学年とも約30%であり、このことは「力がついた」と言えない層がまだ大勢いることを表している。その要因はどのようなところにあるのか。

平成28年の質問紙調査では、実習前と実習後で「ピアノの役割をどう感じたか」、その感じ方の変化について質問を行っている。実習経験の多い2年生は、保育現場において、より幅広いピアノの活用、すなわち可能性に出会ったことで、多くがその必要性を改めて感じたことが記述より読み取れる。一方、前述したように練習頻度の少ない学生の実態がある。必要性を自覚し、保育現場で実践できる力をつけたいと感じながらも練習量に結びついていない。他の興味のあることを優先してしまう学生の現状もあるだろうが、授業を行う側には問題はないだろうか。学習意欲を喚起するものが授業に不足しているのかもしれない。「教材のレベルは本当に各学生に適したものなのか」「もし学生に躓きがあるとすれば、それに対して丁寧な助言・指導ができているのか」「練習の方法が分からないのではないか」等、指導する側にも何らかの要因があるのかもしれない。今回の調査から、学生と教員では「身に付いた」と感じている内容の捉え方や、「力をつけたい、育みたい内容」に相違があることが分かった。このことにも要因があるのかもしれない。

即ち、教員からの一方的な指導にならずに、学生と対話しながら進めていくことが大切であると考えられる。その上で「どこを伸ばすとさらに良くなるのか」という的確な助言によって、学生の気づきや意欲を啓発し、学生が表現することが楽しめる環境をつくるのが教員に求められる。しいては自学の意識づけ、習慣化への足掛かりとなるのではないだろうか。筆者らもこのような情報や見解を指導教員に発信して連携していく体制が必要であることを再確認した。

設問 どのような力がついたと思うか（複数回答可）

学生の回答

項目	学年 順位	1年生 選択率	学年 順位	2年生 選択率
歌のレパートリー	1	72%	1	75%
読譜力	2	65%	2	63%
弾き歌いの力	3	43%	3	58%
演奏技術	4	33%	5	31%
コードネームを見ながら弾く	5	30%	4	32%
表現力	6	15%	8	17%
言葉かけをしながら弾く	7	12%	7	18%
伴奏をアレンジして弾く	8	8%	9	13%
子どもの方に視線を向けながら弾く	9	6%	6	19%

教員の回答

項目	学年 順位	1年生 について	学年 順位	2年生 について
読譜力	1	95%	2	79%
歌のレパートリー	1	84%	1	89%
弾き歌いの力	3	68%	2	79%
演奏技術	3	68%	5	58%
表現力	5	47%	4	68%
コードネームを見ながら弾く力	6	42%	6	53%
伴奏をアレンジして弾く	6	42%	7	47%
言葉かけをしながら弾く	8	37%	7	47%
子どもの方に視線を向けながら弾く	9	5%	9	26%

※教員の回答は 担当学生についての回答である

次に、「力をつけたい」内容として学生のニーズの高かった「弾き歌い」について取り上げる。その前に、改めて今後のピアノ授業に向けた方向性について記す。

V. 「子ども主体」から考える保育実践力

保育現場におけるあらゆる子どもの活動は、あるがままの子どもの姿、そして彼らの主体性を軸に展開される。率直な子どもの欲求や探究心の中にこそ、子どもの生活や遊びを豊かに展開するに必要な要素が含まれている。例えば、まだ言葉を発する前の乳児が、目に入るあらゆる物や人を指差する姿は、日常の生活に親しむ体験を子ども自ら蓄積しようとする主体的活動の一つである。また河原にお散歩に行った子どもが、砂利道のデコボコした大地を体感しつつ、僅かに足を引きずり「ジャリジャリ」と音をたてながら歩くといった姿からは、自然の環境に触れ合う体験を楽しもうとする子どもの気持ちが行動に表れている。保育の役割とは、こういった子どもから発信される活動が、円滑に、そして豊かに展開されることのできる環境を整え、更にそこから子どもの「やってみたい！」の思いや創造性を育てていくことなのである。

保育現場では、保育者のピアノ伴奏によって歌唱活動や身体表現が行われている。また近年では、これらの子どもの活動をCDやMP3などの既存の音源を用いて行うケースも珍しくない。事実多くの園では、これら両方の手段を活動内容に応じて使い分けている。CD、MP3などを使った幼児向けの教材も多く出版され年々その品質が高まっている現在、果たして子どもの活動にピアノを使用する意義はあるのだろうか。この問いの答えは子ども主体の活動の中にこそ見出すことができると考える。子どもの表現には即興的な一面がある。筆者はしばしば子どもが歌唱を行う際、感じたままを素直に、全身を使って表現する彼らの姿を目にしている。一見ただ奏でられる音に合わせて身体を動かしているように思われるが、音に親しみながらも彼らは彼らの世界観の中で各々の表現を楽しんでいるのだ。

CDやMP3などの音源の使用は、子どもが音に合わせて表現することとなるのに対し、生伴奏では、子どもの自由な活動から生ずるテンポやダイナミクスの変化に合わせた表現を

展開する事が出来る。保育者による「弾き歌い」は、まさに子ども主体の活動なのである。

VI. 「弾き歌い」アンケート実施の背景

近年、保育所保育指針、また幼稚園教育要領の改正に伴い、音・図・体といった科目の垣根は撤廃されつつあり、より五領域の専門性を総合的に意識した表現の授業展開が求められている中、養成校として本学におけるピアノ授業の在り方についても検討を重ねている。平成31年度、本学では「保育内容の理解と方法」の選択必修科目として、1年次にピアノ技法、2年次に器楽といったピアノ演習の科目を設置している。本科目では「保育内容の理解と方法」科目の目標に掲げられている「保育の具体的展開のための技術を実践的に習得する」²、また内容として記されている「子どもの生活と遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術を実践的に習得する」²に重きを置き、改めて「弾き歌い」への教育法を見直している。見直しの方法として、1.平成29年度、ピアノ授業の試験において新たに「弾き歌い」に特化した評価項目を設置、2.それに伴いピアノ授業と他の音楽関連授業との連携を試みた。それら二点の過程を経て、学生の「弾き歌い」に対する意識調査を目的としたアンケートの実施を行う運びとなった。

1. 平成29年度「弾き歌い」試験評価項目の設置

まずはじめに、平成29年度より本学ではピアノ試験の評価方法において、子どもの歌唱を豊かに展開するために必要な知識と技術を実践的に学生が習得出来るよう、新たに「弾き歌い」に特化した項目を設置することとなった。

弾き歌い試験 評価項目

<基礎点>

- ① 伴奏に合わせて単に口ずさむのではなく、声（ことば）がはっきり聞こえ、歌う（表現する）意識がある。
- ② 音程が正しい
- ③ 学生のレベルに適した選曲・アレンジである。

<加点>

- ① 音楽性（曲の内容にふさわしい表現。歌・伴奏の総合的な視点から）
- ② 1度も曲が止まらない。
- ③ 「さん はい（本来は4拍子に使う）」「どうぞ」など、歌の入るタイミングを音楽の流れに合わせて伝える。単なる合図（指示）ではなく、それに続いて、子どもたちが歌い出すことのできる音楽的な言葉かけである。

平成28年度に実施したピアノ学習についてのアンケートにおいて、学生が最も力をつけたい項目の大多数は、「子どもの方を向きながら弾く」、「声をかけながら弾く」、「止まらずに弾く」などの弾き歌いに関する内容であった。即ち、保育者として即戦力となる「弾き歌い」技術が十分に備わっていないことを学生自身が問題視していることが明確になったのである。上記の弾き歌い試験評価の加点項目②及び③では、アンケートを参考にこうした学生側からの意見も反映されている。ピアノ教員にはこれらの評価項目を設置することにより、

改めて「弾き歌い」に必要な具体的な技術を明らかにし、学生がこれらを実践的に習得する重要性について徹底した共有を行った。

2. 他授業との連携

次に、平成 29 年度から 1 年次後期科目「子どもの音楽」にて、「弾き歌い」技術の向上に特化したソルフェージュ、また楽典の学びを試験的に展開している。内容については、平成 29 年度常葉大学短期大学部紀要第 47 号 P.157～P.166「保育士・幼稚園教諭養成に要するソルフェージュ教育とカリキュラムの展開についての考察〈1〉」¹¹にて詳細を記している。本学へ入学する学生の 3 分の 2 は、バイエル前半レベルであることから、ピアノ授業だけで上記の評価項目に提示した内容の技術を習得することは困難であるため、他授業との連携を図ることとなった。「弾き歌い」評価項目の基礎点②への対策として、フランツ・ヴェルナー(1832～1902)がミュンヘン音楽学校合唱練習書として作成した「コールユーブンゲン」を用いた音程の学びを導入している。基礎点①については、子どもの歌を用いた日々の歌唱活動と併用し、表現力豊かな歌唱能力の習得を目的に、多様なダイナミクス、アーティキュレーションを含む短い楽曲を筆者が作成、視唱訓練を行っている。基礎点③への対策としてまず徹底して行っているのが、ハ長調、ニ長調、ヘ長調、ト長調、そして変ロ長調の子どもの歌において最も頻繁に採用されている 5 つの調性の主要三和音と属七の実践的演習である。原則として I 度を基本形、IV 度を第二転回形、V 度、または V7 を第一転回形とした規則に基づき、それぞれの和音のポジションを手覚えさせる。また、これら主要三和音と属七和音を楽譜、鍵盤を見ずに演習を行う。最終的には伴奏法として三和音を分散する奏法(アルベルティバスなど)を提示し、実際の楽曲に対し自らがアレンジした伴奏付けを実践的に行っている。新たに「弾き歌い」試験の評価項目が設置されたことを機に、ピアノ授業外で学ぶ必要がある内容を明らかにすることにより、実践的な「弾き歌い」の学びが円滑に展開されるよう試みた。

以上 1. 2. の見直しを経て、本学では平成 29 年度後期ピアノ試験終了時に学生に対し「弾き歌い」技術についてのアンケート調査を実行した。内容は「弾き歌い」評価項目をもとに、学生が個々の「弾き歌い」能力に対して、どのように自己分析しているのかを明らかにするために、選択式の質問項目を 6 つ、自由記述の項目を 1 つ設置している。本調査は個々の技術を学生が自己分析し、それを基に専任教員、指導教員が授業の課題と改善点を明らかにすることを目的として実施された。

VII. アンケート集計結果とその分析

Q. 1 歌いはじめの合図は円滑に行えましたか？

- A. 楽曲の音楽性に適した合図が出来た
- B. 音楽的であるかは曖昧だが、合図は出来た
- C. 合図が出来なかった

集計結果：〈1 年生〉 A.40% B.54% C.6% 〈2 年生〉 A.40% B.55% C.5%

Q. 2 幼児が伴奏に合わせて歌うことを想定し、止まらずに演奏することが出来ましたか？

- A. 目立ったミスなく止まらずに演奏できた
- B. ミスはあったが止まらずに演奏できた
- C. 止まったが直ぐに演奏に戻れた
- D. 完全に止まってしまった

集計結果：〈1年生〉 A.25% B.45% C.22% D.7% 〈2年生〉 A.9% B.48% C.32% D.9%

Q. 3 演奏中目線を外すことが出来ましたか？

- A. 全く外すことが出来なかった
- B. 歌い始めの合図のみ、目線を外すことが出来た
- C. 歌い始め含め、何度か目線を外して演奏出来た

集計結果：〈1年生〉 A.62% B.25% C.13% 〈2年生〉 A.59% B.22% C.19%

Q. 4 歌詞をはっきり唱え、表現する意識を持って歌唱出来ましたか？

- A. 満足に出来たと思う
- B. どちらかといえば出来たと思う
- C. どちらかというと出来なかったと思う
- D. 全く出来なかったと思う

集計結果：〈1年生〉 A.19% B.59% C.17% D.5% 〈2年生〉 A.14% B.64% C.18% D.4%

Q. 5 正しい音程で歌唱出来ましたか？

- A. 出来たと思う
- B. どちらかといえば出来たと思う
- C. あまり出来ていなかったと思う

集計結果：〈1年生〉 A.40% B.51% C.9% 〈2年生〉 A.35% B.53% C.12%

Q. 7 授業における弾き歌いの学びを振り返り、最も進歩した、自身を持てたと思うことは何ですか？

- A. 止まらず演奏する
- B. 歌い始めの合図
- C. 正しい音程で歌う
- D. 表現する意識を持ち、歌詞をはっきり歌う

集計結果：〈1年生〉 A.50% B.31% C.5% D.14% 〈2年生〉 A.45% B.24% C.11% D.20%

(Q. 6 については自由記述であるため、後に内容を提示する。)

1 年生集計結果 (評価の高い順)

A. 「弾き歌い試験」で評価の高かった項目	B. 授業を通して進歩したと思う項目
1. 歌い始めの合図・正しい音程で歌唱する(対) 2. 止まらず演奏する 3. 表現する意識を持ってはっきりと歌詞を唱える 4. 演奏中目線を外す	1. 止まらず演奏する 2. 歌い始めの合図 3. 表現する意識を持ってはっきりと歌詞を唱える 4. 正しい音程で歌唱する

2 年生集計結果 (評価の高い順)

A. 弾き歌い試験で評価の高かった項目	B. 授業を通して進歩したと思う項目
1. 歌い始めの合図 2. 正しい音程で歌唱する 3. 演奏中目線を外す 4. 表現する意識を持ってはっきりと歌詞を唱える 5. 止まらず演奏する	1. 止まらず演奏する 2. 歌い始めの合図 3. 表現する意識を持ってはっきりと歌詞を唱える 4. 正しい音程で歌唱する

上記の集計結果を経て、A. 弾き歌い試験で評価の高かった項目、B. 授業を通して進歩したと思う項目を比較することにより、学生が「弾き歌い」に対してどのような自己分析をしているかを調査する。まず、1年生のA. 弾き歌い試験で評価の高かった項目をみると、「歌い始めの合図」、「正しい音程で歌唱する」(ともに40%で対)、「止まらず演奏する」、「表現する意識を持ってはっきりと歌詞を唱える」、「演奏中目線を外す」の順であったことが明らかになった。これに対し、B. 授業を通して進歩したと思う項目は、「止まらず演奏する」、「歌い始めの合図」、「表現する意識を持ってはっきりと歌詞を唱える」、「正しい音程で歌唱する」の順で評価されている。これらA.B.の結果を比較してみると、「歌い始めの合図」、「止まらず演奏する」はともに上位であることから、比較的学生の意識が高い項目であると考えられる。「正しい音程で歌唱する」については、進歩したとは感じていないもの、試験での自己評価は高いことから、学生にとっては意識が薄い項目であると思われる。また、「表現する意識を持ってはっきりと歌詞を唱える」については、A.B.共に高い評価を付けている学生が圧倒的に少ないことから、学生の自信がない、また授業での取り組みから成果を感じにくい項目であることがわかった。Aの「演奏中目線を外す」においては、一年次後期「子どもの音楽」授業のみで取り組んでいる内容なので、今回B. 授業を通して進歩した点からは敢えて外している。また、本項目は「弾き歌い」の中では最も難しい技術ということもあり、試験での評価が低いことは妥当であると考えられる。

2年生のA. 弾き歌い試験で評価の高かった項目は、「歌い始めの合図」、「正しい音程で歌唱する」、「演奏中目線を外す」、「表現する意識を持ってはっきりと歌詞を唱える」、「止まらず演奏する」順であったことが分かった。これに対し、B. 授業を通して進歩したと思う項目では、「止まらず演奏する」、「歌い始めの合図」、「表現する意識を持ってはっきりと歌詞を唱える」、「正しい音程で歌唱する」の順であり、1年生と同じ結果となっている。2年

生の集計においてまず注目すべきは、「止まらず演奏する」の項目である。本項目は A. においては、高い評価を付けている学生こそ少ないが、同時に最低評価を付けている学生も少人数である。また B. においては最も高い評価を付けていることもあり、試験においての自己評価がかなり厳しく成されていると考えられる。また、「演奏中目線を外す」の項目は、まだまだ評価は低いものの、唯一 1 年生より高い評価を示している。これらは実習を通して現場での実践経験を経た 2 年生ならではの結果かもしれない。「表現する意識を持ってはつきりと歌詞を唱える」においては、1 年生同様低い評価を付けている。

次に、自由記述として提示した Q. 6 「試験を通して自信がついた、または進歩したと思うこと、そうでないこと」を用いて、学生が本試験をどのように捉えているか考察する。まず 1 年生は、進歩したこと、またそうでなかったことの両項目において最も記述が多かった内容は「歌唱」についてであり、全体の約 45% を占めている。内容としては「大きな声でハキハキと歌えた」「人前で歌うことに自信が持てた」や、「うまく人前で歌えない」、「ピアノを演奏しながらだと、歌がずれてしまう」などである。次に多かったのが、28% を占めた「緊張」についての記述で、「緊張したがしっかりと最後まで演奏出来た」や「緊張して練習通りの演奏が出来なかった」などの意見が多く見られる。2 年生においても「歌唱」についての記述が最も多く、全体の 39% を占めている。また内容については 1 年生と比べると多岐に渡り、「人前で歌うことが恥ずかしくなくなった」、「演奏を間違えても動じることなく歌えるようになった」や「目線を外すと歌唱しにくい」、「ミスが続くと声小さくなる」などの意見がみられる。同時に「緊張」についての記述は全体の 20% で、やや減少傾向にあることが分かった。以上の結果、両学年共に「歌唱」に対しては最も強い意識を持ち、本試験に臨んでいることが明らかになった。また特に 1 年生においては「緊張」への意識が高い状況で試験に望んでいる学生が多いことも判明した。

VIII. 「弾き歌い」の授業展開における今後の課題

本調査の目的は、「弾き歌い」の学びにおける学生の自己分析を通し、今後の授業展開に活かす課題を見出すことであった。その結果、「表現する意識を持ってはつきりと歌詞を唱える」・「演奏中目線を外す」の 2 項目に対して、学生が最も自信がないと感じていることが明らかになった。また「弾き歌い」試験においては「歌唱」への意識が高く、多くの学生がかなりの緊張感を覚えていることが明らかになった。

まず、「表現する意識を持ってはつきりと歌詞を唱える」の技術向上については、次のような対策が考えられる。

1. 日頃より歌唱する楽曲の歌詞は覚えるようにする。
2. 比較的簡単な楽曲を、左手の簡易的なコード伴奏のみを用いて歌唱する。
3. 子どもと楽しく歌うことを前提とした歌唱活動を行えるよう、授業での環境を整える。

特に 3. においては、保育における実践的な学びを学生に提供できるよう、専任教員と指導教員が十分に配慮し、環境を構成する必要があると考える。尚、1. ～ 3. の対策は、「演奏中目線を外す」の技術に対しても効果的に働くと考える。先にも述べたが、演奏中に鍵盤か

ら目を離し、子どもと歌唱を楽しむことは「弾き歌い」でも最も難しい技術である。習得に時間がかかる技術であることから、2年生後期「弾き歌い」評価の加点項目に加えるなどの対策を取るべきであろう。また評価項目の一つとして学生へ明確に提示し、早期から少しずつトレーニングする機会を授業内で設ける必要があると考える。

最後に「弾き歌い」試験の実施方法について改めて検討したい。現状、学生はかなりの緊張感の中で試験に臨んでいる。緊張感を持ち「弾き歌い」に取り組むこと自体は、実習へ挑む学生には大切な要素ではある。しかしながら、現状試験においては、学生は指導教員に対して練習の成果を発表する環境しか整っておらず、現場に出て味わう緊張とは異なると感じる。本来の「弾き歌い」のように、まず活動の導入から始まり、幼児と保育者といった役割を設置するなど、模擬実践のような取り組みを採用した試験の展開を試みたいと考えている。

IX. 終わりに

ピアノ授業において、各学年の目標やその達成のための具体的な基準と試験内容、さらに評価の基準を文章化したことは、指導教員にとって概ね良い評価を得ている。学生にとっても達成目標が明確になり自分の進捗を確認しながら学習していくことが容易になったと考える。しかしながら具体的にどの部分に効果があったのか。調査によると「力がついた」と回答の多い項目も、パーセンテージは高いとは言えない。さらにピアノの必要性を自覚し、実践力をつけたいと願いながらも練習量に結びつかない学生の実態も見えた。効果を上げるには、学生の練習量を増やし習慣化していく必要がある。

それには指導教員の存在は大きい。学生と教員が対話しながら、一人ひとりの学生の習得状況を把握し、優先すべき内容を考え、学生の要望にも耳を傾けながらメニューを提案していく姿勢が大切である。なぜ今この学習が必要か、それが子ども達の遊びを支える技術にどう繋がっていくのか、見通しを持ちながら進めていくということである。

重要なことは、子ども主体に展開される遊び、すなわち表現を充実させるための環境の一つとしてピアノがあるという視点であり、これを教員と学生が共有して進めていかねばならない。子どもの歌う姿を支える「弾き歌い」においても、「ピアノが子どもの歌声に合わせる」「子どもと共に表現する」という意識を常に持ちながら学習する必要がある。

本研究では、個別指導の内容の充実を図り、基礎力強化と実践的な内容のバランスをとっていくこと、また自学の意識づけ、弾き歌いの取り組みにおいて課題が認められた。また指導教員と学生が対話しながら解決の方法を模索していく内容や、音楽関連授業と連携しながら育むべき内容があることを再確認した。

平成31年の保育士養成課程改正に向けて、改めてピアノ授業の在り方を考えるとき、本研究で得た見解を指導教員に発信し、今後も専任教員と指導教員が情報・意見交換する機会を大切にしていきたい。そして「子ども主体に展開される保育におけるピアノ」について共通理解を持って、それを学生の指導に生かしていきたい。

引用・参考文献

- 1 村上玲子, 三島瑞穂 (2017) 保育者養成校における教科目「保育表現技術」の捉え方と課題－音楽担当者の立場からの考察－ 人間生活科学研究第53巻, p.26

- 2 厚生労働省子ども家庭局「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部改正について（子発 0427 第 3 号 2018 年 4 月 27 日）
- 3 加藤明代，藤掛絢子（2017）保育者養成校におけるピアノ授業についての一考察 日本保育学会第 70 回大会発表要旨集
- 4 厚生労働省 第 5 回保育士養成課程等検討会（2010 年 2 月 26 日）資料「基礎技能」と「保育表現技術」の目標と内容についての比較資料である。
- 5 文部科学省幼稚園教育要領（1998 年 12 月施行）
- 6 山崎正（2004 年）「保育科専門科目『ピアノ技法』レッスンのあり方について」実施にあたってのガイドとして、本学のピアノ実技担当教員及び音楽専任教員に配布されたものである。
- 7 村上玲子，三島瑞穂（2017）保育者養成校における教科目「保育表現技術」の捉え方と課題－音楽担当者の立場からの考察－ 人間生活科学研究第 53 巻，pp.22 - 23
- 8 安田寛，長尾智絵（2010）「保育におけるピアノの流行」と保育者養成機関ピアノ教員の関心の在り方との関係について 奈良教育大学紀要第 59 巻 1 号（人文・社会），p.161
- 9 紙屋信義，後藤みゆき（2008）ピアノによる子どもの歌伴奏の効果 - アレンジによる伴奏を考える - 東京未来大学研究紀要第 1 号，p.72
- 10 文部科学省 中央教育審議会 大学分科会第 71 回（2008 年）配布資料「学士課程教育における方針の明確化」第 2 章第 1 節
- 11 森広樹（2017）「保育士・幼稚園教諭養成に要するソルフェージュ教育とカリキュラムの展開についての考察〈1〉」平成 29 年度常葉大学短期大学部紀要第 47 号，pp.157 - 166

付記

本研究 IV 章「アンケート結果分析からの考察－本学ピアノ実技の授業効果－」は、日本保育学会第 70 回大会ポスター発表（倉敷 川崎医療福祉大学）「保育者養成校におけるピアノ授業についての一考察」に、新たな知見を加え加筆したものである。